

江戸川区教育委員会と区内小学校の実践例

「確かな学力の向上」に 本気で向き合う

東京都江戸川区立下小岩小学校は、同区が進める「学力向上プロジェクト」に先進的に取り組んできました。教師の授業改善や「学習カルテ」を活用した個別学習、さらには、令和6年度からは「アイテム算数」を教材として採用し、上位層と下位層の学力向上に力を入れています。校長先生や先生方に学校での取り組みや授業での活用方法をお伺いしました。



下小岩小学校 編

「個別最適な学び」の実現を目指して！



江戸川区立下小岩小学校
鶴田麗子 校長

江戸川区が推進する「学力向上プロジェクト」に先行して取り組んできた下小岩小学校。鶴田麗子校長によると、区から提供される「学習カルテ」は4・5年生のみですが、学校独自に2・3・6年生分も作成し、一人ひとりの算数の定着度を教員も子供も把握できるようにしているといいます。その学習カルテをもとに、自分の苦手

な単元や課題に取り組む15分の「学習タイム」を各学年で週2日実施。ほかにも、江戸川区が示す「算数授業スタンダード」を取り入れ、教師の授業力向上にも力を入れています。

アイテム算数について鶴田校長は、C・D層の基礎定着はもちろん、これまで不足していたA層育成の手立てにつながると判断し、年間3冊購入していた計算ドリルからアイテム算数に切り替えました。「計算問題なら、今はタブレットで利用できるデジタルドリルもありますし、アイテム算数の中にも計算問題はあります。計算ドリル3冊分とアイテム算数の費用も変わらないので、A・B層の子供たちが授業中に課題を終わった後に取り組める問題がたくさんある点がいいと思いました」と話しています。

学力向上プロジェクトに取り組んでから、すでに6年生の算数では目標とする東京都の平均に近

づくなど大きな成果も出るようになったと鶴田校長。給食前の隙間時間に校長室に児童が訪れて、かけ算九九に取り組み、上級生が下級生の丸付けをする姿も見られるといいます。「かけ算九九を習得すると自信がつき、学習に主体的に取り組める児童が増えてきました」と鶴田校長は児童の変化を語っています。

授業では「導入」と「習得」を活用 学力差のある児童たちの個別学習に

算数の研究主任を務める木村智子教諭は、アイテム算数の導入について、「購入した以上、すべての問題を全員が取り組まなければいけないと最初は困惑したのですが、できる子だけが取り組む問題も含まれていると知って安心しました」といいます。現在は、導入の「練習しよう」と、習得



左より、下小岩小学校 遠藤 匠教諭、研究主任 木村智子 教諭、田中絢乃 教諭

江戸川区が取り組む「学力向上プロジェクト」

江戸川区は、児童・生徒の学力向上をめざし、「学力向上プロジェクト」を令和6年度から本格スタートしました。小学算数に関しては、「教員の授業力向上」と「C・D層の基礎定着、B層をA層へ引き上げること」に力を入れています。



事務局 教育指導課
学力向上プロジェクト推進局
局長 倉田克彦氏

その施策として、算数授業の流れを解説した冊子「江戸川区 算数授業スタンダード」を作成し、区内の全教員約3000人に配布。また4・5年生を対象に「江戸川区学力定着度調査(算数)」を行い、1人1人の定着度を単元別に可視化した「学習カルテ」を

作成しました。「学年をまたいだ振り返り学習が可能になり、できる部分、できない部分がわかることで、子供たちも教員も目標をもって取り組んでほしい」と倉田氏。また、B層をA層へ引き上げるために、習熟度に応じた応用問題を授業で取り上げる施策も進めています。その教材1つとして「アイテム算数」を採用し、各学校への配信を始めています。千葉氏は同プロジェクトについて「さまざまな学力層への支援を充実させ、現場の先生が求めるものを提供していきたいです」と語っています。

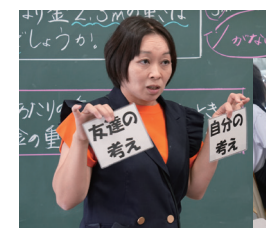


江戸川区教育委員会
統括指導主事 千葉一知氏

の「たしかなものにしよう」を授業や家庭学習で取り組み、活用の「見方・考え方を広げよう」や探究の「チャレンジしよう」は、授業中に早く問題が終わったA層の児童たちが取り組む個別学習のひとつとして活用されています。「アイテム算数の問題はいろいろなやり方や考え方ができ、どの解き方が一番良いかを子供たちと話し合ったり、みんなで解き方を考えたりできるのが良いですね」と木村教諭は語っています。

6年生を担当する遠藤教諭は、C・D層の児童たちが繰り返しいろいろなパターンの問題に触れられるのがメリットで、学力の定着につながるといいます。「教科書の問題だけでは数が足りないので、各単元に設定されている時間を半分アイテム算数に振り分け、練習問題に取り組む時間を多めに取っています」と説明。その際、児童が1人で進めるのは難しいので2人1組で取り組んだり、みんなで解き方を1つ1つ進めたりと工夫しています。

3年生を担当する田中教諭は、アイテム算数には解くのが面白い問題が多いといいます。『円と球の形』の単元では、「ただ円を描くだけでなく、指示通りにテキストに書き込んでいくと全体が絵になるように工夫されていて、子供たちが楽しみながら取り組んでいました」(田中教諭)。また問題をノートに書き写す作業が苦手なC・D層の児童には、「テキストに直接書いて良いよ」と言うと、むしろやる気を出してくれます。アイテム算数はテキストに直接書き込めるのが良いですね」と話してくれました。



子供たちの考える
時間が増える
授業へ



子供たちが深く考える学びへ B層をA層に引き上げたい

木村教諭は、アイテム算数の問題にはB層をA層に引き上げる問題も多く、「子供たちが深く考えられるようになっている」と話されています。教科書とは違うパターンの問題が多く、最初は児童たちも抵抗感があったようですが、「難しそうに見えた問題でも、やってみたら解けたという経験が重なり、『よし、やってみよう!』という気持ちになってくれています」と話します。

遠藤先生も「活用」や「探究」などのパートは歯ごたえのある問題が多く、個別学習の中で児童が考える時間を作れているといいます。一方で、支援が必要な児童に対応する時間も確保でき、「さまざまな学力層に対応できる教材が1冊あること」で、教員も余裕をもって授業に取り組んでいます。さまざまな学力の児童に合わせながら学力向上をめざす、そんな授業にアイテム算数が生かされています。

